

吟遊詩人 デイラン・トマス

伊原 五郎*

詩人として非凡であつたばかりでなく、詩の音声表現においても卓越した才能を発揮したデイラン・トマスは、ウェールズの出身、バードの後えいであつた。ウェールズは遠くケルトの血を引く。ケルト人は自然を崇拜し、靈魂不滅、輪廻の思想を持ち、彼等の社会にはドルイドという司祭集団が存在した。ドルイドは神通力を備えた超能力者で、神と人との媒体者として民衆の精神的支柱者になっていた。彼等は、医術、天文、魔術にも通じ、王の面前では豎琴に合せて神や英雄の歌を吟ずる詩人でもあつた。そして、ドルイドの時代が終わってからも、ドルイドの伝統は継承され、ウェールズではバードがこれにとって代わつた。バードの多くは王侯貴族に抱えられ、宮廷行事に召されて詩歌を献じたり、戦にあつては主君の必勝を予言してうたつた。その後、貴族が減び、王が絶えると、スポンサーを失つたバード達は吟遊詩人として諸国を回り、旅先々で人を集め、豎琴に合せて英雄の物語を吟じ、中には請われて呪文や祈禱等を行う者もあつたという。文字に残さず、すべてを言葉で語り聞かせたウェールズの詩歌の古き伝統は、やがて時代を経てウェールズ独特の込みいった韻律を生むにいたつた。本稿では、そうしたウェールズ詩の特質に触れながら、トマスの詩がいかにウェールズ詩の影響をこうむっているかを明らかにしていきたい。

I

トマスは、評論「ウェールズの詩人」の中で、ウェールズの伝統詩は吟唱詩歌の形式をとり、この形式は“a great deal of assonance and most complicated internal rhyming;”¹⁾に依存し、このスタイルを英語の詩に使用した場合は、英語本来の特質が変化し、あい昧になる、と述べ、その使用について否定的であつた。ところが、1945年の後半からトマスの作品の中にウェールズ詩の痕跡を求めるブームが生じた²⁾。この風潮に対してトマスは1952年12月9日付けのステイブン・スペンダーに宛てた返事の中で“I’m not influenced by welsh bardic poetry. I can’t read welsh.”³⁾と、彼の詩がウェールズ詩の影響を受けていないことを明言した。しかし、それ以降もトマスの詩がウェールズの詩と深く係わりあっていることへの究明の熱は冷めないまま今日に至っている。そして、本稿の狙いもそこにある。ついては、先ず、ウェールズの伝統詩と呼ばれるものの形式について、その詳細から述べることにしたい。

CYNGHANEDD⁴⁾

ウェールズ詩にはハーモニイを意味する“Cynghanedd”というシステムがあつて、四種類のタイプに分れるが、多分これがトマスのいう“most complicated internal rhyming”なのであろう。

1. Cynghanedd Groes

このタイプは、一行が中間休止で二部に分れ、いずれにも一つの中心になるストレスがあり、前

* 東京情報大学教授

半の子音群が後半でも同じ順序で繰返され、共に同じ中心的ストレスに結びついているものである。

A rose blóom / where Isobel wálk'd
r z bl- r z b l -

One víllage / in a válléy
n v-l- n v- l-

To reveal / a true valóur
t r v- l tr v- l-

2. Cynghanedd Draws

このタイプはCynghanedd Groesと同じであるが、同じ順序で繰返される子音群の間に一つ、もしくはそれ以上のマッチしない子音が介在しているものである。

My lass léads / a blameless life
m l s l- (bl) m l s l-

Lólling / beneath the lílac
l - l (bnth) l-l

Aróse / betrays its présence
r- z (b tr z ts p) r-z-

3. Cynghanedd Sain

このタイプは一行が三部に分れ、一部の終わりが二部の終わりとライムを踏み、二部と三部とはアリタレーションをなすものである。

By the bréeze / the trées / entránc'd
tr- (n)tr-

His bow / and árrrow / dáring
d- r- d-r-

The weak / who seek / are succour'd
s- k (r) s- k-

Embracing / the súrging / séa
s- rj- s-

4. Cynghanedd Lusk

このタイプは行の最後の音節にストレスが無い場合に限られる。語尾から二番目のアクセントのある音節が行の初めに生ずる語とライムを踏んでいるものである。ただし、最初のライムにはアクセントがある場合もあれば無い場合もある。

The flowers wélcome Summer

They come to naught in Autumn

以上がCynghaneddのシステムである。このスタイルの初期の原型は6世紀の初め頃に見ることが出来るが、より成熟した形でいん脈をきわめたのは中世になってからである。ウェールズにあつ

ては、冒頭でも述べたように口伝が高度に発達し、詩人が専門化し、何世代にもわたり歌いつがれてきたが、口伝の世界に属するテキストは残念ながら存在しない。ところが、幸いなるかな、ウェールズと同族関係にある隣国アイルランドには断片ながら古い資料が残存している。ここでウェールズ詩にも大きく寄与したであろう口伝の源流からその一滴のタイプを掘りあげ、ウェールズ詩の特徴に加えるのも無意味ではあるまい。

5. Chain Alliteration

このスタイルは行末の語が次の行の最初の語とアリタレーションを踏み連鎖されたものである。

Luin oc elaib,	黒鳥は白い鳥にはかなわない
ungi oc dírnaib,	一オンスは百ポンドにはかなわない
drecha ban n-aithech	百姓女は女王様にはかなわない
oc rodaib rígnai;	王様もドムノール王子にはかなわない
rig oc Domnall,	ヨーデルも教会賛美歌にはかなわない
dord oc aidbse	火の粉も燭台の火にはかなわない
adand oc caindil,	剣という剣ことごとく
calg oc mo chailgse ⁵⁾	わたしの剣にはかなわない

この詩は604年、アイルランド、コーク州のクロインの僧院長として葬られた聖コールマンが教授料としてドムノール王子から拝領した剣を称えてうたった詩で、各行最後と最初のdirnaibとdrechaの[d], rígnaiとrigの[r], Domnallとdordの[d], aidbseとadandの[a], caindilとcalgの[k]がそれぞれ頭韻を踏んでいる。

II

Walford DaviesとRalph Maudの編著になるトマス“*collected Poems 1934-1953*”, 1989年版からCynghaneddのシステムの影響が見られると思われる詩行を(比較的looseなものを含めて)順を追って取上げていきたい。

1. Cynghanedd Groesと2. Cynghanedd Draws

God in béd/good and bád (*When I woke. 2s*)
 g d n b-d g d n(d) b-d
 ベッドの中の善と悪との神

And the owl hood/the heel hider (*Once below a time*, II, 1s)

そして ふくろうの頭巾が くびすを覆うものが

Horned down with skullfoot/and the skull of toes (*Altarwise by owl-light*, III)

どくろの足 と 足指のどくろを踏みならし

この行は前部の子音の一部がカバーされていない上に中心となるストレスとの関係も不備で、極めて不完全なものであるが、このタイプの変形として加えることにした。

With brídabait/of gold bread (*How shall my animal*, 3s)

金色のパンの花嫁の餌をつけて

For the bird/lay béded (*A winter's tale*, 25s)

何故なら小鳥は寝かされていた

Drove in the heaven/-driven of the nails (*Altarwise by owl-light*, VIII)

天 駆ける釘 打込み

Like a tower/on the town (*The seed-at-zero*, 2s)

町の上に 塔のように

3. Cynganedd Sain

Each rung a love or losing to the last (*I fellowed sleep*, 6s)

時間は夫々愛の鐘を響かせるか 次第に薄れて消えていく

Or stay till the day I die (*Ears in the turrets hear*, 4s)

それとも私が死ぬ日までとどまり

In the stitched wound and clotted wind, muzzled (*I dreamed my genesis*, 4s)

縫い合わされた傷口と血で固まった風に…口輪をはめた

Oh as I was young and easy in the mercy of his means (*Fern Hill*, 6s)

おお 仲介役の時のおかげで、ぼくが子供でのびのびしていられた頃

Weighed in rock shroud, is my proud pyramid (*I make this in a warring absence*, 6s)

(それは) 岩のきょうかたびらを着てのしかかり, わたしが誇るピラミッド

By red-eyed orchards sow the seeds of snow (*Foster the light*, 2s)

赤い目をした果樹園のそばに雪の種を撒け

That bury the sweet street slowly, see (*A saint about to fall*, 2s)

美しい町並をしずかにしずめていく (洪水) を見よ

All love but for the full assemblage in flower (*Unluckily for a death*, 3s)

(生きた肉体の) 花の中で心いくまで出会いが無ければ, すべての愛は

With men and women and waterfalls (*Ballad of the Long-legged Bait*, 43s)

男 や 女 や それに 滝

Crashes, and slowly the fishing holy stalking heron (*Over Sir John's hill*, 1s)

(尖光を) 砕き, 魚に忍びよる聖なる青鷺はゆっくりと

No springtailed tom in the red hot town (*Lament*, 3s)

灼熱の町の雄のトビムシではなく

For my sulking, skuling, coal black soul (*Ibid.*)

ぼくのすねて こそこそかくれる 石炭の黒さの塊のために

Hill. Who once in gooseskin winter loved all ice leaved (*In the white Giants' Thigh*)

かつて が鳥の肌をした冬にすべて氷の葉をつけたものを愛した女...

Pleading in the waded bay for the seed to flow (*In the White Giants' Thigh*)

歩いて渡れる入江に種子が流れますようにと懇願する

Hill, and there grow young, under the grass, in love (*Elegy*, 2s)

青草の下で若返り 愛に満たされますように

4. Cynganedd Lusg

The lying likeness of (*Our eunuch dreams*, IV)

横たわれるよく似たもの

raising mán like a móuntain (*I, in my intricate image*, I, 2s)

山のように人間をもちあげる

Finding the water final (*Ibid.*, I, 6s)

海 の 果て を 求めて

Mán was Cadaver's masker, the harnessing mántle (*I, in my intricate image*, III, 6s)
人間は「死体の」仮装者だった 「死体を」まとう外套だった

World in the sánd, on the triangle láandscape (*Altarwise by owl-light*, IX)

砂の中の世界を三角形の風景の上に

5. Chain alliteration

Lapping the still canals, the dry tide-master

Rabbed between desert and water storm,

Should cure our ills of the water

With a one-coloured calm;

The heavenly music over the sand

Sounds with the grains as they hurry

Hiding the golden mountains and mansions

(*We lying seasand*)

ひたひたと静かな運河に押寄せ
砂漠と水の間に囲まれた
その乾いた潮の主は

わたしたちの水のわざわいを
 一色の静寂で癒さねばならぬ
 金色に輝く連山や邸宅をかくしながら
 砂粒が急ぎ足で過ぎていく時は
 その砂粒と共に響きわたる

From salt-lipped beak to the kick of the stern

Sing how the seal has kissed her dead !

The long, laid minute's bride drifts on

Old in her cruel bed

(Ballad of the Long-legged Bait, 21s)

塩辛い唇をしたくちばしから船尾のスリルにいたるまで
 アザラシが彼女にキスして殺してしまった顛末を歌ってくれ
 横たえられた瞬間の、その長い花嫁は
 彼女の残酷なベッドの中で流れつづけて老いるのだ

Her molten flight up cinder-nesting columns,

Calls the starved fire herd, is cast in ice.

Lost in a limp-treed and uneating silence.

Who scales a hailing hill in her cold flintsteps

Falls on a ring of summer and locked noons.

(I make this in a warring absence, 4s)

燃え殻を重ねあわせた柱の上
 彼女の溶けた飛行についていく獣が
 飢えた炎の群れに呼かけ氷にされ
 力なく枝を張り食欲を無くしている沈黙の中へと消える
 彼女の冷たい火打ち石の足取りに合せ あられ降る丘を登る者は
 環状の夏と閉じこめられた真昼の飢えに転落する

6. 次いで屢々目にふれる詩形でCynhanedd Sainのスタイルをトマス流に変形したのではないかと
 思われる詩行について例を挙げる。

一行が二部に分れ、前半の先の語と後半の後の語とライムを踏み前半の後の語が後半の前の語と
 アリタレーションの関係になっている。

Of new man strength, I seek the sun (*I dreamed my genesis*, 7s)

新しい男の力の(幻影である) わたしは太陽を求めて探す

An air-drawn windmill on a wooden horse (*Today, this insect*, 3s)

木馬に乗って風に引かれる風車

My lips are withered with a kiss (*Find meat on bones*, 3s)

わたしの唇は 口づけで 萎え

Of summer come in his great good time (*Lament*, 3s)

とても楽しい時に 夏の(酷暑の) …

At last the soul from its foul mousehole (*Ibid.*)

遂に魂はその不潔な鼠穴から

And I gave my soul a blind, slashed eye (*Ibid.*, 5s)

そして わたしは わたしの魂に深傷を負った盲目の目を与え

Chastity prays for me, piety sings (*Ibid.*)

貞節はわたしのために祈り 信心深い心は歌う

A cold, kind man brave in his burning pride (*Elegy*, 1s)

誇り高きがゆえに勇敢な、冷静にして心優しくった男

ライムとアリタレーションの順序を逆にした例

My world is pyramid. The padded mummer (*My world is pyramid*, II, 1s)

わたしの世界はピラミッド、肉じゅばんを着た俳優は

この他、トマスの複雑なインターナル・ライムの例として代表されるものに“The conversation of prayers”がある。これは中世のレオ詩体をさらにひとひねりしたものである。

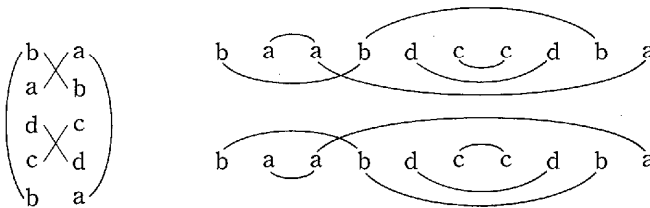
Will be the same grief flying. Whom shall they calm ?

b a

Shall the child sleep unharmed or the man be crying ?	a	b
The conversation of prayers about to be said	d	c
Turns on the quick and the dead, and the man on the stairs	c	d
To-night shall find no dying but alive and warm	b	a

同じ悲しみとなって飛んでいこう その二つの祈りは誰の心を鎮めるのか
 子供は無事に眠るだろうか 男は声をあげて泣いているだろうか
 唱えられようとしている祈りの対話は生者と死者に向けられ 階段の男は
 今宵 二階の愛する女が（男の火のような熱い思いやりの中で）
 命を取止め あたたく生きていくのを知らう。

この詩はライムが行末韻と並行して行内相互間に起こるインターナル・ライムである。特徴は“flying”と“crying”, “calm”と“unharmed”, “said”と“dead”, “prayers”と“stairs”のごとく相互にクロスしながら, b a a b d c c d b a の交替を繰返しながら進行する。今このライムを線図化してみると



等々、一見してケルトの組紐を連想させるような図柄が出来る。そして類が類を呼んで互いに響き合いながら微妙な音が生れるのである。

III

ウェールズ詩がおびたしいアソナンスやアリタレーションに依存していることは既に述べた通りで、最後にそれ等について検証したい。

(a) アリタレーション

アリタレーションの例は挙げるに暇がない。ここでは特に同音二回以上の頭韻を繰返しているか、あるいは二種類以上の音の頭韻を踏んでいるものを夫々音声別に取り上げることにする。

With whistler's cough contages, time on track [k, t] (When, like a running grave,
 10s) 口笛を吹く者の咳の伝染で トラックを走る時は

Give over, lovers, locking, and the seawax struggle [l, s] (I, in my intricate image,
 III, 3s) およし, 恋人達, 閉籠もるのを それに 蠟と灯りの (愛) の葛藤を

No man more magical, clawed out the crocodile [m, k] (Ibid., III, 4s)

誰も及ばぬ魔術でもって 鰐を引摺りだした。

We watch the show of shadow kiss of kill [w, ʃ, k] (*Our eunuch dream*, II, 2s)
殺しのキスの映像を銀幕にみる

As motor muscle on the drill, driving [m, d] (*I dreamed my genesis*, 1s)
穴を明けながら突き進むモーターの筋肉のように

On that cloud coast to each grave-gabbing shade [k, g] (*I followed sleep*, 4s)
あの雲の岸辺で墓が夫々にしゃべる影

When we were strangers to the guided seas [w, s] (*Incarnate devil*, 2s)
わたし達が時に支配される海について無知だった頃

And breaks his shell in the last shocked beginning [b, ʃ] (*Today, this insect*, 2s)
最後のショックをうけて始まる中で自分の殻を

Where words and water make a mixture [w, m] (*Before I knocked*, 5s)
言葉と水が混じりあうところ

Calls some content to travel with the winds [k, w] (*Why east wind chills*, 3s)
風を道連れの道中に 満足せよと呼掛ける

Season and sushine, grace and girl [s, g] (*Find meat on bones*, 4s)
季節と陽光と 慈悲と少女と

Her flash was meek as milk, but this sky ward statue [m, s] (*After the funeral*)
あの人の肉体はミルクのように優しかった だが この空に向かった記念像は

The salt sucked dam and darings of the land [s, d] (*Do you not father me*, 4s)
塩分を吸った母と地上の幸運児達

The size of genesis? the short spark's gender? [s, dʒ] (*Altarwise by owl-light*, IV)
起源の大きさなのか? 短い火花の性なのか?

Bread and milk mansion in a toothless town [m, t] (*I make this in a warring absence*, 2s)
歯の抜けた町のパンとミルクの館

Three-syllabled and starry as the smile [s] (*In the beginning*, 2s)
微笑のように三音節で星形をした

Each rung a love or losing to the last [l] (*I followed sleep*, 6s)

夫々が愛の鐘を鳴らすのかそれとも消えて末路を辿るのか

And pick the thumb-stained heaven through the thimble [θ] (*My world is pyramid*,

I, 5s) 指貫を通して親指に汚された天を突く

From the fair dead who flush the sea [f] (*I see the boys of summer*, II, 2s)

海も赤らむ美しい死者から

Of dreaming men make moonly suckers [m] (*When once the twilight locks*, 6s)

夢見る男共の中で…月の乳飲児になる

And wharves of water where the walls dance and the white cranes stilt [w] (*Over*

Sir John's hill, 4s) 壁が踊り白い鶴が竹馬に乗っている波止場で

Deep in its black, base bones [b] (*Poem on his Birthday*, 10s)

深くその黒くして卑劣な骨格の中に

Dolphins dive in their turnturtle dust [d] (*Ibid.*, 4s)

いるかがひっくり返ったほこりの中で潜り

(b) アソナンス

アリタレーションに習い、音声別に夫々一例ずつ挙げることにする。

Of lover, mother, lovers, or his six [ʌ] (*If I were tickled by the rub of love*, 6s)

恋人、母親、恋人達の…それとも…彼の六フィートの(からだ)

Blowing the old dead back; our shots shall smack [æ] (*Our eunuch dreams*, IV, 2

s) 老いたる死者を吹き戻し われらの一撃に音がはじける

And what's the rub? Death's feather on the nerve? [e] (*If I were tickled*, 7s)

そして摩擦とは何だ 神経に生えた死の羽毛か

Shall it be male or female? say the cells [ei] (*Ibid.*, 2s)

男にしようか それとも 女にしようか と細胞どもは言い

Your mouth, my love, the thistle in the kiss? [i] (*Ibid.*)

ねえ、君、君の口は口ずけの時のあざみの花か

The dream has sucked the sleeper of his faith [i:] (*Our eunuch dreams*, III, 2s)

夢は男の信仰から眠れるものを吸収した。

My dear would I change my tears or your iron head [iə] (*If my head hurt*, 4s)
 いとしい者よ わたしは涙もあなたの鉄の頭も改めようとは思わない

We watch the show of shadows kiss or kill [ou] (*Our eunuch dreams*, II, 2s)
 殺しのキスの映像を銀幕に見る

Who climb to his dying love in her high room [ai] (*The conversation of prayers*, 1s)
 二階に伏して死を待つ愛する女のもとへと階段を登っていく

The sound about to be said in the two prayers [au] (*Ibid.*, 2s)
 この子供と男によって唱えられようとしている祈りの対話

All nerves to serve the sun [ə:r] (*How soon the servant sun*, 3s)
 全神経を太陽に奉仕させ

Hérons spire and spear [ər] (*Poem on his birthday*, 1s)
 青鷺たちが尖塔よろしく首筋を伸ばし、槍のように直立する

And the winged wall is torn [ɔ:] (*Vision and prayer*, I, 2s)
 羽の生えた壁は引裂かれ

Ninepin down on the donkeys' common [ɔ] (*Lament*, 1s)
 ロバの群れる共有地で九柱戯のピンを転がす

Moved in his poor hand I held, and I saw [u:] (*Elegy*, 6s)
 わたしが握った父の哀れな手に (死者達の川が) 忍びより そしてわたしは見た

(c) 以上、数々の引用例の中にはアリタレーションとアソナンスが同時に発生、交錯した詩行がいくつも見受けられるが、それらの中から代表的なものを一、二選んでみる。

And stake the sleepers in the savage grave (*My world is pyramid*, I, 3s)
 野蛮な墓地に眠れる者たちを杭につなぐ

[s] のアリタレーションと [ei] のアソナンスがいずれも三箇所て互いに呼応し合っている。

We watch the show of shadow kiss of kill (*Our eunuch dream*, II, 2s)

既出の例である。[w, f, k] のアリタレーションと [ou] と [i] のアソナンスがペアになって並列し、移り行く季節の色をしのばせる感がある。

むすび

ディラン・トマスは1951年の夏、彼の作詩に関する、さる研究者の質問に対し、彼がいかにリズムやリズムやシンタクスに腐心し、あらゆる古今の技巧を取入れるかを語った上で“the twistings and convolutions of words, the inventions and contrivances”は骨の折れる仕事ではあっても楽しいと述べている⁹⁾。では、トマスがここで援用した「言葉のより合せとか、渦巻き」とはいったい何を意味するのか。思うに、トマスはこの時ケルトの装飾美術の基本をなす紋様パターンを描いていたに違いない。*Bardic style in the poetry*の著者シーラ・ディーンも、トマスの詩のシンボルやイメージは「どことなくケルトの精密なマンダラー、ケルトの結紐に似ている。こうした形の裏には、子宮の中の子供の発育、体内を勢いよく流れる血液の網目模様、死すべき運命にあるものが、状況によって駆立てられたり、制限されたりするすべての人間活動が隠されている」⁷⁾と述べている。

文字を残さず、すべてを言葉で語ったケルトの時代に、視覚に訴える唯一の方法として考えられたであろうケルトの紋様には、その図柄を愛する者の夢や願いが託されている。結紐はシーラ・ディーンの言説のように、体内を勢いよく流れる血液が結節に塞ぎ止められて、休止し、緊張し、突破してまた流れるダイナミックな生命活動を暗示する。あるいは、これを放射線に見立てるならば、光輪と同じようなキリストの神聖さと理解できるかもしれない。他方、渦巻きは、ヨーロッパでは屢々、生—死—再生をシンボライズする迷宮、つまり、死の国に入っていきながらキリストの愛により再び生に到る装置として考えられた。死への下降と同時に生への上昇、この二極対立の思想はケルトの特徴である。

トマスの詩はこれまで見てきたように、複雑、巧妙に仕組まれた音響が互いに呼応し、反響し合うものであるから、音の道筋をあるいは直線で、あるいは曲線で追跡しながら結び合せていくと、まさしくトマスの「より合せ」や「渦巻き」が出来上がるのである。従って、トマスの詩が視覚化されたものをケルトの紋様とみるならば、ケルトの紋様を聴覚化したものがウェールズの詩のスタイルであり、同時にトマスの詩のスタイルとも重なるわけである。かくして、二つのケルトの紋様が語りかけてくる声に耳を傾けるならば、誰もが、それらがトマスの詩に一貫して流れるテーマ、つまり、生（性）と死と祈りの響きにいかに類似しているかに気づくことであろう。

注

1. Dylan Thomas, *Quite Early One Morning* (London, 1968), p.386.
2. Dylan Thoms *New Critical Essays*, edited by Walford Davis (London, 1972), p.6.
3. Constantine Fitzgibbon, *Selected Letters of Dylan Thomas* (London, 1966), p.386.
4. Meic Stephens, *Literature of Wales* (New York, 1986), p.115.
5. David Greene & Frank O'connor, *Irish Poetry A.D.600 to 1200* (London, 1967), p.3.
6. Constantine Fitzgibbon, *The Life of Dylan Thomas* (London, 1965), p. 371.
7. Sheila Deane, *Bardic style in the poetry of Gerard Manley Hopkins, W. B. Yeats, and Dylan Thomas* (Michigan, 1989), p.8.

参考文献

Louise Baughan Murdy, *Sound and Sense in Dylan Thomas's Poetry* (Paris, 1966)

Clark Emery, *The World of Dylan Thomas* (Florida, 1970)

Tindall, *A Reader's Guide to Dylan Thomas* (New York, 1981)

田中 清太郎・羽矢 謙一訳：ディラン・トマス全詩集，国文社（1982）

田中 清太郎・松浦 直巳・三橋 光共訳：ディラン・トマス全集Ⅲ，国文社（1967）

石井 白村：英詩韻律法概説，篠崎書林（1968）

鶴岡 真弓：ケルト装飾的思考，筑摩書房（1989）